

小学校国語科教科書の中に見るジェンダー

味 呑 文 絵

1. はじめに

日本の義務教育において、教科書は授業の中で重要な役割を果たしている。その教科書は「編集」「検定」「採択」を経て、使用されることになる。特定の事柄に偏った考え方をもちたいような配慮が、検定基準には示されているが、その偏りのなかにジェンダーの考え方が含まれていないとどうなるであろうか。「男性はこうだ。女性はこうだ。」といった明示的な記述がなかったとしても、繰り返し同じイメージを抱くような記述や挿絵などの表現があると、子どもは無意識のうちに考え方を内面化してしまう可能性がある。

こうした問題を捉えるために、教科書をジェンダーの視点から分析した研究はこれまでも行われてきた。国際婦人年をきっかけに結成された「行動する女たちの会」⁽¹⁾をはじめいくつかの分析が行われている。「行動する女たちの会」は1979年度版の教科書を取り上げ、その中の中学校国語教科書では、「女は自我を持ってない」「男は頼りになるべきだ」といった男の子と女の子のイメージを固定してしまうものや父親像や母親像を固定してしまうような文章が教科書中の教材が使われていると分析している。1948年から1997年までの中学校社会教科書を分析した氏原陽子(1997)⁽²⁾は年代が進むごとに男性中心のメッセージは薄らいではいるが、男性女性がつく職業が固定されていることは一貫していると指摘している。1992年と1996年と2000年の小学校国語教科書を分析した日景弥生と早川和江(2001)⁽³⁾は父親母親が常にいるという前提にたっていることを、将来の家族像に固定的なイメージをもつことにつながる危険性があると指摘もしている。これらの先行研究によって、男性と女性の役割を固定する性別役割分業や性別によって性格が決められているのではないかといった考え方が示されている。

本研究では現行の国語教科書をジェンダーの視点から分析し、固定化されたジェンダー概念が教科書にどれくらい書き込まれているかを検証する。本論では特に、物語教材に限定して調査を行うが、それは感情移入しやすいという点でジェンダーも概念の内面化に影響を与えやすいと考えたからである。なお、今回分析の対象とするのは、平成27年度版小学校国語教科書で文部科学省で検定済みの5社⁽⁴⁾を扱う。分析については氏原(1997)の研究を参考に数量的分析と質的分析の二つの側面から行うこととする。

2. 数量的分析

2-1. 数量的分析の対象と方法

5社の平成27年度版学校固定教科書において、物語教材は全部で185教材ある。有名教材に関しては、異なる出版社で同じ作品が重なっているが一つと捉えず、現れた数だけ調べている。

以下の2点で調査を行った。

① 主要な登場人物の男女の数を「男性」、「女性」、「不鮮明および性別がない」の3つにわけて数を調べる。

② 全体の挿絵からの大人の働く男女の数を調べる。

②の大人の働く男女の数は、物語のみに絞ると数の偏りが大きくなるため、今回は国語教科書全体での数を見ることとした。

次に数量的調査項目の設定理由について説明する。まず、「①主要な登場人物の男女の数」についてである。物語教材の中に出てくる主要な登場人物の性別が男性か女性かはつきりしているものの数を数え、偏りがみられるのか調べていくものである。この分析について牛山恵(2005)は以下のように述べている⁽⁵⁾。

教育に携わる者はだれも〈男が中心〉とか〈普遍的なのは男〉などとは思っていないだろう。しかし、国語科教科書の中で、生き生きと動き回っているのは男子が多く、女子の出番が極めて少ないということになれば、〈男が中心、普遍的なのは男〉ということを知っていることになる。教科書の公共性を考えれば、看過できない重要な問題だ。

このように、牛山は性別に関する数的偏りがあることで子どもたちが〈男が中心〉であると思いきみかねないと指摘をしている。登場人物における性別の数に偏りがあることは、子どもに固定的な考えを持たせる原因になりかねないのである。

次に「②大人の働く男女の数について」である。氏原(1997)は以下のように述べている。

働く男女のそれに占める割合を出す。そうすることによって、「男は仕事・女は家庭」という、いわゆる性別役割分業にもとづく役割分担がみられるかどうか、みられるとすればどの程度かを明らかにすることができる。

氏原は「男は仕事・女は家庭」に基づく性別役割分業に教科書がそっているのかをみることができると述べている。このようなことから、今回の論文では数量的な分析においては「主要な登場人物の男女の数を男性、女性、不鮮明および性別がないそれぞれの数」「大人の働く男女の数」の2つの数量を調べ、分析を行いたい。

2-2. 数量的分析の結果

2-2-1. ①登場人物の数について

物語教材における男女の数を調べた結果は下の表のようになった。学年ごとにまとめたものである。

		1年	2年	3年	4年	5年	6年	計	割合
登場人物	男性	26 (62%)	24 (65%)	19 (63%)	23 (79%)	18 (72%)	17 (77%)	127	69%
	女性	5 (12%)	4 (11%)	8 (27%)	6 (21%)	6 (24%)	4 (18%)		
	不明	11 (26%)	9 (24%)	3 (10%)	0 (0%)	1 (4%)	1 (5%)	25	13%

学年ごとの数の比較では、男性が常に20人前後の数となっており、女性も常に一定で4～8人の間である。学年が上がっても、それぞれの数が大きく変化するわけではない。このことから一つの学年に取り立てて差があるわけではなく、どの学年でも共通でみられる特徴であることがわかる。最も数の差があるのは1年生で、21人の差がある。なお、1年生や2年生などの低学年は登場人物が人間でない場合が多くみられたため、「不明」の数が増えている。

合計でも男性と女性とでは100人近く開いており、少しずつの差がかなり大きな差を生んでいることがわかる。

先行研究では、平成8年度版の教科書について日景・早川(2001)が主人公の性別の割合を調査している。作文教材も加えた調査であり、その点で本論とは少し異なるが、教育出版では男性63.6%女性29.5%となっている。教育出版の現行教科書の結果は男性80%女性13%と教科書会社のなかで最も差が大きい。また5社全体でも男性69%女性18%となっており、平成8年度版よりも数値に偏りがみられる。主人公の数は最新版でも変わらず問題としてあり続け、むしろ悪化していることがわかる。

2-2-2. ②大人の働く男女の数について

先にも述べたように、物語のみに絞ると数の偏りが大きくなるため、ここでは国語教科書全体の挿絵を対象とした。以下の表は、学年ごとでまとめたものである。

		1年	2年	3年	4年	5年	6年	計	割合
職業人	男性	35 (54%)	44 (59%)	38 (58%)	76 (76%)	65 (68%)	125 (70%)	383	66%
	女性	30 (46%)	31 (41%)	28 (42%)	24 (24%)	30 (32%)	53 (30%)		

男性の職業人の割合は職業人の女性の割合より、高い数値を出している。出版社別では、一番低いもので東京書籍の 61 %、一番高いもので三省堂の 75 %が挙げられる。5 社全体では 66 %が男性の割合で、これもまた、半分を大きく上回る結果となっている。能や狂言、歌舞伎など伝統的な職種も入るため、それも男性の割合が多い原因の一つとなっている。しかし、やはり男性と女性の数に偏りがみられるのはこの項目でも例外ではない。

氏原陽子（1997）は挿絵に現れている働く男女の数を、中学校社会科教科書を用い、分析している。実際に働く男女の数は、1978 年と 1993 年を比較すると男性が減少しており、また 1978 年と 1997 年の比較では女性の数が増加しているという。社会科教科書の挿絵も 1972 年の東京書籍では男性の割合が 80 %近くにのぼり、年が進むにつれて女性の数が増えていくが、問題点として示されている。

先行研究からも女性の割合は低いことがわかり、また現行も男性 66 %女性 34 %という点からも今もなお、残り続けている問題だといえる。

2-3. 数量的分析の考察

上記の結果から、学年によって主人公の数も働く男女の数も違うが、常に男性が女性の数を上回るかたちで、男女の数に偏りがみられることがわかった。どちらの項目も子どものジェンダー観を固定化する可能性のあるものだといえるが、特に物語教材の主人公に関しては何時間もかけて授業を行うことも多く、登場人物の性別に偏りがあることは非常に深刻であるといえる。主人公の数を男女半々にすれば、差がなくなるのか、ジェンダーに対する固定的な考え方がなくなるのか、といえばそうとは言えない。しかし、主人公の数に、ここまで大きな差があることは事実であり、子どもに固定的な考えを持たせる原因のひとつとして取り扱うべきだろう。

3. 質的分析について

3-1. 質的分析の対象と方法

対象は数量分析と同様に、小学校国語科教科書 5 社に掲載された物語 185 教材である。質的な分析方法について、氏原陽子（1998）⁽⁶⁾ は数量的な分析を補完するものとなると述べている。この方法によって、数だけではなく、男女がどういった描かれ方をしているかによってもみていくことができる。そこから、既存の固定的なジェンダー観に沿う描写、即ちジェンダー・ステレオタイプが教科書の中にどのように書き込まれているかを知ることができる。本論では、先行研究をもとに、以下の 4 つについての調査を行った。

① 性格

主に内面をみるものである。女は内向的で自分自身で動かないのか男性は外交的で率先して動くなど、性別によって偏りがあるかについてである。

② 見た目

主に他人から見たときの外面のものである。髪型、服装など、性別によって偏りがあるかについてである。

③ 役割

主に社会的な役割についてである。女性が内、男性が外という固定観念があるかについて、また家族の中の母親父親像、職種などについてである。

④ 趣味趣向

その登場人物がどういったことを好んでいるのかといった、ものの好みにおいて、性別の偏りがあるかについてである。

またそれぞれの項目の細かな分析は以下の点に留意して行う。

①性格

1 内向的・外向的などの性格

ここでは、男の子が外交的な性格、女の子が内向的な性格だとみられる描写について取り上げていく。

2 問題解決能力の偏り

物語の中などで、なにか問題が起こったときに対処している登場人物が男性に偏っていないかについてみていく。

3 関係からみる男性像・女性像

男性の発言力が強く、女性の発言力のほうが弱い、男性に女性がおびえるといった男性に対して女性が弱い立場であるように示す描写の偏りについてみていく。

②見た目

4 髪形

女性の髪形が長い男の子の髪形が短いといった男女の髪の長さが決めつけられていないかについてみていく。

5 服装・色

女の子・女性はスカート、男の子・男性はズボンなど男女によって分けられているものを見ていく。色に関しても女性は赤色やピンクといった暖色系、男性は青色や水色といった寒色系ばかりを着ていないかについてみていく。

③役割

6 性別役割分業

女性が内、男性が外という形になっているかについて取り上げていく。

7 職業

男性・女性が就いている職種に偏りがなくかについてみていく。女性が補助的な役割ばかりをしていないか、男性ばかりが人の上につつま仕事ばかりをしていないかなどである。

8 父親像・母親像

家族の中で父親と母親の役割についてみていく。母親はおしとやかで父親は活発であるかのような描写になっていないかについてみていく。

④趣味趣向

9 趣味趣向

登場人物の趣味や好きなものについてである。たとえば、女性の登場人物は裁縫やお人形遊びのようなおとなしいものが好きであったり、男の子が休み時間遊んでいるのは常にサッカーや野球など、活発なものになっていないかについてみていく。

3-2. 質的分析の結果

3-2-1. 物語教材の傾向

質的分析を行うにあたって、教科書会社すべての物語教材のなかから、共通する教材を調べた。下の表は左から教材名、扱われている学年、共通で見つけられた出版社の数、出版社名である。するとすべての出版社で共通して扱われている教材は「おおきなかぶ」「ごんぎつね」「大造じいさんとがん」の3つで、4つの出版社で共通しているものは6教材、3つの出版社で共通しているものは3教材、2つ出版社で共通しているものは13教材ある。出版社によって扱われる学年は違うものの、1年から6年まで定番教材は存在している。以下、その表である。

教材名	学年	数	出版社名
おおきなかぶ	1年	5	光村図書・教育出版・東京書籍・三省堂・学校図書
ごんぎつね	4年	5	光村図書・教育出版・東京書籍・三省堂・学校図書
大造じいさんとガン	5年	5	光村図書・教育出版・東京書籍・三省堂・学校図書
かきこじぞう	2年	4	教育出版・東京書籍・三省堂・学校図書
お手紙	2年	4	光村図書・東京書籍・三省堂・学校図書
モチモチの木	3年	4	光村図書・教育出版・東京書籍・学校図書
白いぼうし	4年	4	光村図書・教育出版・三省堂・学校図書
一つの花	4年	4	光村図書・教育出版・東京書籍・学校図書

いなばの白うさぎ	1.2年	4	光村図書・教育出版・東京書籍・三省堂
スイミー	1.2年	3	学校図書・光村図書・東京書籍
きつねのおきやくさま	2年	3	学校図書・教育出版・三省堂
木竜うるし	4.5年	3	学校図書・教育出版・東京書籍
ろくべいまってるよ	1年	2	三省堂・学校図書
わにのおじいさんのたからもの	2.3年	2	学校図書・教育出版
世界で一番やかましい音	4.5年	2	学校図書・東京書籍
注文の多い料理店	5年	2	学校図書・東京書籍
やまなし	5.6年	2	学校図書・光村図書
川とノリオ	6年	2	学校図書・教育出版
きつねの窓	6年	2	学校図書・教育出版
ないた赤おに	2年	2	教育出版・東京書籍
雪わたり	5.6年	2	教育出版・三省堂
三枚のおふだ	2.3年	2	学校図書・光村図書
海の命	6年	2	光村図書・東京書籍
わすれられないおくりもの	3年	2	教育出版・三省堂
おにたのぼうし	3年	2	教育出版・三省堂

ここで分析の前提として、前述の4つの観点から、物語教材を分析した場合の数量的データをあげておく。

25の共通教材と111の単体教材、あわせて136の物語教材について、男女の固定的な①性格②見た目③役割④趣味趣向が見られた数は以下の通りである。「割合」は問題数の合計に対して各項目が占める割合を示している。また共通教材に関しては共通教材の問題数の合計である。152に対して各項目を占める割合を書いている。カッコにおいて書かれた割合は全教材の問題数313に対して各項目の割合になる。

項目	物語全教材問題数	割合	物語共通教材問題数	割合
①性格	109	35%	46	30% (15%)
②見た目	82	26%	41	27% (13%)
③役割	109	35%	60	40% (19%)
④趣味趣向	13	4%	5	3% (2%)
計	313	100%	152	100% (49%)

④はそれほど多くない。これはそもそも趣味趣向の記述自体が少ないためである。①②③の項目ごとにみていくと「③役割」と「①性格」に関する項目での数が多いことが分かる。共通教材もやはり、「①性格」と「③役割」の問題数が多い。さらに、すべての教材と共通教材のみの数とを比較すると、共通教材が「③役割」の問題のおよそ半分を占めていることがわかる。

このことから、教材全体が男女の性格について固定的なイメージを作っているが、「③役割」については、共通教材の方が、よりその傾向が強いことがわかった。また全体の割合としても問題の半分近くは共通教材によるものだということがわかる。

3-2-2. 「ごんぎつね」の例

では、共通教材をみていくこととしよう。5社の共通教材は「おおきなかぶ」「ごんぎつね」「大造じいさんとガン」の3つである。その中でも特にジェンダー的特徴が大きいと考えられる新美南吉「ごんぎつね」を中心に取り上げ、分析する。以下前提となる情報を記す。

新美南吉「ごんぎつね」(4年生)

5社間に大きな本文の異同はない、挿絵がそれぞれ異なるため、挿絵に言及する際は出版社名を付す。あらすじは以下の通りである。

〔あらすじ〕

ごんぎつねのごんは兵十のうなぎを取ってしまうのだが、どうも兵十の母親が死ぬ前に食べたいといったうなぎを盗んでしまったらしいことに気づく。ごんはおわびに、くりやきのこを兵十の家の前においていた。ごんが置いてくれたとは知らずに、ある日ごんを見つけた兵十は、うなぎを盗んだぎつねだとごんを撃ち殺してしまう。そのあとに土間にくりが積まれているのを見て、ごんがいつもくりをくれていたことに兵十は気づく。

この作品にも②見回目③役割④趣味趣向において問題点がみられるが、特に顕著な例として③と④についてみていくことにしたい。

③役割について

主人公は兵十という名前の男性であり、他にも男性の登場人物では、弥助、加助、吉兵衛など多くの名前が出ている。しかし女性を示す言葉としては、兵十のおっかあ、弥助の家内といった言葉が使われ、あくまでも男性に対してどういう存在であるかを示すものみであった。

また兵十のおっかあの葬式の準備で大勢の人が集まり、料理をつくっている様子をごんが見つかる場面がある。大勢の人が集まり、なにかを作っていると文章では書かれているにもかかわらず、三省堂版の挿絵では、そのほとんどが女性として描かれている。これは「性別役割分業」のイメージにあてはまるものといえよう。実際に家事をしているわけで

はないが、割烹着のような服を身につけている女性が多く見られ、エプロンから、家事をするということに無意識につなげてしまうのではないと思われる。また性別役割分業を含むとする理由には子どもをつれてるのは、女性のみといったこともある。以下が上述の挿絵の一例である⁽⁷⁾。

挿絵 1 三省堂4年下 長野ヒデ子 絵



④趣味趣向について

兵十のおっあかの葬式の場面で弥助の家内がおはぐろをつける、新兵衛の家内がかみをすいているといった身支度の描写があるのは女性のみであり、自分自身を飾ったりすることを好むのは女性であるかのようにみえる。また弥助の家内や新兵衛の家内は物語上必要ではないにも関わらず、この身なりを整えるだけに登場してきていることからわかる。

ごんぎつね作品全体としては、女性の個性がかなり少ないといえよう。兵十や、兵十の友人など男性はセリフも多くあることから性格を想像することは可能である。しかし、ごんが栗や松茸を兵十に持っていききっかけになる母親に関してはどういった性格なのか、兵十とどのような関係なのかなどは明記されておらず、個性をつかむことはできなかった。女性の個性がないということと、性別役割分業がはっきり示されていることが特徴として挙げられる教材である。

3-3. 質的分析の考察

共通教材である「ごんぎつね」は主人公が男性であるばかりでなく、細部においても固

定的なジェンダー観を反映した教材であることがわかった。共通教材はかなり昔から扱われているため、原作が単体教材よりも全体的に古く、物語の中で性別役割がより多く描かれている傾向があると考えられる。共通教材の問題も含め、現在の教科書はジェンダーに関する課題をいまだに多く抱えているといえよう。

4. これから求められる教科書

4-1. 「白い花びら」の例

ただし、教科書の物語教材すべてに問題があるというわけではない。固定的概念にとらわれていない作品もいくつかみられるのである。今回は代表として、やえがしなおこ「白い花びら」の分析を挙げる。教育出版のみ掲載の3年生の教材である。

やえがしなおこ「白い花びら」

〔あらすじ〕

ゆうたは友達のかずきにつれられて野原に行く。かずきが向こうに行って一人になったときに林に向かって話しかけている女の子を見つける。かずきに呼ばれ、目を離している間に女の子はいなくなってしまう。その後かずきにつれられて馬の形のような岩を見つける。違う日に一人で野原に入るのをためらっているときにこの前見た女の子を見つけ岩に登るように言われる。岩にのると岩は黒い馬のようになり、女の子と馬で駆けていく。前を走っていた女の子の髪から花びらが飛んでくるのを見ている間に女の子は馬に乗ったまま先のほうに消えてしまった。また違う日かずきと一緒に野原に行くとき最初に女の子が立っていた場所には一本のさくらの木が立っているのを見つける。

ここでは、①性格に関して、特に既存のジェンダー概念にとらわれていない部分に注目したい。主人公のゆうたは一人では野原に入らず、常に友達のかずきや不思議な女の子と共にいる。男の子の主人公ではあるものの一人では行動するのが苦手といった性格がみられる。また不思議な女の子が登場するが彼女は一人で行動し、ゆうたに向かっても「のらないの」「しゅっぱつするよ」など指示するような言葉をかけている。それに対して、ゆうたは「えっ」や黙ったままといった応答をしており、女の子のほうが積極的に行動していることがみられる。また黒い馬に乗っている場面が変わっても、女の子が先に進み男の子がその後を追うといった形が取られている。今までにはこのような形はあまりみられないので新しい教材であるといえるだろう。そのため「①性格」の「1 外向的な性格・内向的な性格」のイメージを崩していると考えられる。

しかし、男の子は馬に乗っている最中、前を走る女の子を追い抜こうとする描写があり、常に受身ではなく積極的な一面も見せているのは今までの形と同じである。また積極的に行動する女の子が現実の女の子ではなく、不思議な女の子であるという点も考慮が必要だろう。

4-2. これから求められる教科書

「白い花びら」のように新しい形を示した教材はいくつかみることができた。しかし、一方で性別に関するステレオタイプが多く書き込まれていることも、これまで指摘した通りである。既存のジェンダー観を反映したジェンダーステレオタイプは、他者認識をゆがめるといった危険性がある。つまり、「人はステレオタイプに一致しない情報に出会うと、そのステレオタイプに合うようにその情報をゆがめて解釈」⁽⁸⁾してしまう危険性を伴うのである。

また、ステレオタイプを内面化することで自分の個性を抑圧したり、生きづらさを抱えてしまったりする危険もある。つまり、ステレオタイプは実際の人びとの認知や行動に影響を与えるのである。だからこそ、ステレオタイプが教科書に数多く盛り込まれていくことの意味をあらためて問わねばならないのである。定番教材の問題を含め、これらの教科書にはこうしたジェンダー・ステレオタイプへの敏感さが求められるのではないだろうか。

5. おわりに

本論では、現行の小学校国語教科書を取りあげ、ジェンダーの観点から分析を行った。筆者自身が小学校のときに学んでいた物語たちが、現在も扱われていた。しかし、実際に分析してみると多くの問題をみつけることになった。ジェンダーに関する固定的な考え方の原因がすべて教科書というわけではない。学校生活のなかであれば、教師の言動、クラスメイトの考え方など様々なことが子どもたちの考えをつくっていくのであろう。しかし、その原因の一つとしても教科書があげられるのではないだろうか。

今回、「①性格」「②見た目」「③役割」のように、問題点を分析のために分けてはいたもののこれらは別のものでなく、結び付いているものである。「①性格」は性別役割分業といった、男性女性の役割を固定することと関わっている。その役割の固定化が女の子・男の子内面にまで及んできているのが「①性格」なのではないであろうか。これは「②見た目」にも関わってくるだろう。

現在は家族の形や関係性というものも変わってきている。母親がエプロン姿で会社帰りの父親を向かえ、母親の作った料理を子ども、父親、母親で食べるといったこれまでステレオタイプで了解されてきたような構図は現実では変わってきているのだ。共働きや子どものいない世帯、単身世帯の増加など家族の形が多様になってきている。生き方が多様化しているにも関わらず、広く根付いている性別役割分業のために生きにくさを感じている人も多くいるだろう。教科書という、多くの子どもが目にする書物が固定的な考え方しか示さないようなのであれば、子どもたちのもつ様々な可能性をつぶしてしまうことにもなりかねないのではないだろうか。だからこそ、これからの教科書には、ジェンダーの観点への敏感さが求められるのである。

参考文献・引用文献・参考URL

- ・『編集復刻版 行動するわたちの会資料集編 第4巻』六花出版 2015年
- ・片岡徳雄、島田博司、八並光俊、浦田広朗、大膳司 「教科書の数量的分析」『広島大学教育学部紀要 広島大学教育学部 第一部』34号 1985年
- ・氏原陽子「教科書におけるジェンダーメッセージ(I):中学校社会科・公民的分野の数量的分析」『名古屋大学教育学部紀要 教育学』44巻1号 1997年
- ・氏原陽子「教科書におけるジェンダーメッセージ(II):中学校社会科・公民的分野の質的分析」『名古屋大学教育学部紀要 教育学』44巻2号 1998年
- ・永田麻詠「小学校国語科教科書とジェンダー 「わらぐつの中の神様」を中心に一」『国語科授業論叢』2号 2010年
- ・永田麻詠「小学校国語科教科書に見る隠れたカリキュラムの考察:ジェンダーおよびクィアの観点から」『国語教育思想研究』4巻 2012年
- ・牛山恵「小学校国語科教材とジェンダー」『都留文科大学研究紀要』61巻 2005年
- ・日景弥生・早川和江「小学校国語科教科書における隠れたカリキュラム」『弘前大学教育学部紀要』85巻 2001年
- ・鍵主智美「国語教科書と日本語教科書の比較:ジェンダーの視点から」『金沢大学論文集』4巻 2009年
- ・内閣男女共同参画局 (2016年10月1日閲覧)
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19921101001/t19921101001.html
- ・文部科学省ホームページ (2016年6月17日閲覧)
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/gaiyou/04060901/1235086.htm
- ・義務教育諸学校教科用図書検定基準 (2016年11月21日閲覧)
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/1260042.htm
- ・日本教材出版 2016(平成28)年度 全国教科書採択表 (2016年11月30日閲覧)
<http://www.nihonkyouzai.jp/11089.html>
- ・平成27年度版 東京書籍 小学校国語科教科書 1-6年
- ・平成27年度版 光村図書 小学校国語科教科書 1-6年
- ・平成27年度版 教育出版 小学校国語科教科書 1-6年
- ・平成27年度版 三省堂 小学校国語科教科書 1-6年
- ・平成27年度版 学校図書 小学校国語科教科書 1-6年
- ・平成21年度版学習指導要領解説国語編

注

- (1) 国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会教育分科会「女はこうして作られる教科書の中の性差別」1979年(本論では『編集復刻版 行動する女たちの会資料集編 第4巻』六花出版 2015年を参照した)
- (2) 氏原陽子「教科書におけるジェンダーメッセージ(I):中学校社会科・公民的分野の数量的分析」『名古屋大學教育學部紀要 教育学』44巻1号 p.92 1997年
- (3) 日景弥生・早川和江「小学校国語教科書における隠れたカリキュラム」『弘前大学教育学部紀要』85巻 2001年
- (4) 5社とは学校図書・教育出版・三省堂・東京書籍・光村図書を指す
- (5) 牛山恵「小学校国語科教材とジェンダー」『都留文科大学研究紀要』61巻 pp.23～43 2005年
- (6) 氏原陽子「教科書におけるジェンダーメッセージ(II):中学校社会科・公民的分野の質的分析」『名古屋大學教育學部紀要 教育学』44巻2号 pp.95～106 1998年
- (7) なお、国語教科書の挿絵について詳細を追うと、問題点が多くみられる。例えば、5社の挿絵すべてを4つの観点で分析すると、固定的なジェンダーがみられた箇所は①性格で121、②見た目170、③役割102、④趣味趣向65であり、挿絵全体のうち割合は①26%②37%③22%④15%となる。
- (8) 木村涼子・伊田久美子・熊安貴美江編著『よくわかるジェンダー・スタディーズ—人文社会科学から自然科学まで』p.96 2013年

(本学学部生)